

From Asian countries to Gunma

ー外国人就労生たちとの触れ合いの中でー

頼富 雅博

家族を残して関西での単身生活を2年経験し、今春前橋へと戻ってきた。駅前のけやき並木やルナパークの変わらぬ姿に安堵を覚えながら、一方で心に浮かんだのは「さあ、何をして働こうか」ということだった。50の坂を越え、人生のセカンドステージを迎えた自分と向き合う日が始まる。大学を出て以来、社会人としてのほとんどを学校の教員として過ごしてきた身で、教員免許以外に履歴書に書ける資格もなし。誇れるような特技も持ち合わせてはいない。案の定、ハローワークに通ってみても自分の応募できるような職はどこにもない。さすがに月日が経過するにつれ、生来呑気な性格の私にも焦りが増幅してくる。そんな中で知己の先生からもたらされたのが「日本語教師をしてみませんか」という話だった。

もちろん、これまでに外国人に日本語を教えた経験は皆無。おまけにどのようなテキストを使い、具体的にどう教えればよいのかもわからないという状況の中だったが、たとえささやかでも小さな国際貢献ができればという軽い気持ちで引き受けることにした。

そんな風にして迎えた初授業の日。私の前にはベトナム、中国からの女子生徒30人余りが行儀よく並んでいた。真新しい出席簿で一人一人の名前を呼ぶ声が震える。ニャムさん、ニユンさん、ニユンさん、カンさん、ハンさん、パンさん……。全部同じ名前に見えてくる。汗をかきつつ、全員の名前を呼び続けた。なるだけ簡単な日本語を使って話しかけたつもりが「それでは」「たとえば」「つまり」といった言葉に生徒たちは反応してはくれない。当然である。彼女たちは前日に日本に到着したばかり。そして、個人差はあるものの、事前の日本語教育も短期間の受講という状況だった。私の日本語にはキョトンとした顔をし、苦し紛れにジェスチャーや下手な絵を書くのが起る。それが彼女たちとの出会いだった。

そんな彼女たちのことを少し説明させていただきたい。彼女たちの日本での身分は「就労生」。厚生労働省の管轄でアジア各国から日本に来て、さまざまな労働に従事する人たちである。従って、所詮留学生とは性質を異にする。私が担当した日本語の授業もやがて工場などで働くときに日本人労働者とスムーズに意思の疎通が行えるようになることが最大の目的だ。開講の直前に渡されたテキストも例文の大半は工場での実践的会話だった。山や花といった単語よりも社長、部長、工場長、班長といった職階の違いや残業、早出、遅番とは何なのかを覚えさせるのが優先だった。

とにかく教えることの全てが難しい。例えば、方向や位置を教える授業で私は緊張のあまりしばらくの間自分から見ての右、左を何度も繰り返して教えていた。自分の右は生徒の左。そのことに気がつき、「ごめんね、先生まちがえました」と大慌てで訂正したりと失敗の日々が続く。私の心の中は出航してすぐに座礁に乗り上げた船のようだっ

た。これまで30年近く中学や高校で国語教員をしてきた経験と少しばかりの自負は木端微塵に砕け散った。国語教師と日本語教師は全く違う職種なのだということが授業を重ねながら痛感していくことになった。「わかりづらくてごめんね。」日々の授業を終えるたびに心の中で生徒たちに謝る自分がいた。

53歳の日本語新米教師。家にテキストを持ち帰り、ああでもない、こうでもない。煩悶を友にの教材研究が続く。スーパーのちらしの裏に説明をわかりやすくしようと下手な絵を練習する。描けども描けども満足のいく絵にはならず。「そう言えば、中学の美術の成績は2か3だったなあ」。そんなことを思い出した。

生徒の方とは言えば、真剣そのもの。わずか3週間足らずで働くための「日本語」をマスターしなければならない。カリキュラムもハードなもので、1日の授業は8時間びっしり。文法、会話、語彙・表記、日本文化……。多岐にわたる科目が設定されている。午前9時の始業から外はとっぷりと暮れる夕方6時まで授業が毎日続いていく。昼休みに教室で死んだように熟睡している彼女たちの姿を見ながら、健気さに心打たれた。

それでも、授業中眠る生徒はいない。こちらの手くそな授業にも真剣に耳を傾け、ホワイトボードの難しい漢字や文法の板書を一字漏らさず、ノートに写し取っていく。中には日本の高校生よりも数段達筆で流れるような文字を書く生徒もいた。相手は外国人だという初めの意識が私の中から徐々に消え去る。代わりに心に湧いてきたのは日本人の生徒を教えていた頃の「生徒って可愛いなあ」という心だった。勤勉な生徒のおかげで、私も少しずつ教える余裕が生まれ、休み時間に交わす彼女たちとの何気ない会話が潤滑油となってくれた。

そんなある日、中国人生徒の何人かが放課後に寄ってきた。「先生、野菜どこで買えばいいですか?」。「どんな野菜?」と問うと、間髪入れず「安い野菜です」という声が返ってくる。人参一本の値段がいくらかも知らない自分だったが、彼女たちについてくるように言って、夜の前橋の街を開いているスーパーを探して歩いた。幸い、大きなスーパーがあったが、商品の値札を見て悲しそうな顔をしている生徒たちを見て、更に安い八百屋を求めて生徒と商店街を歩くことにした。日々授業に追われる生徒たちには初めての街歩き。どの顔もにこにこ輝いている。「これは団子」「ほら、テキストに出てたね、ここは喫茶店だよ」。気がつけば、街中で日本語授業の9時間目が始まっていた。

この体験は私に大きなヒントをくれることになった。教室で概念的に日本語を教えるのには限界があること。それよりも、「本物を見せる、感じさせる」場を用意してあげることが彼女たち就労生の日本語獲得に直結していることを実感した。それまでのややもすれば反復ばかりをメインに置き、表面的で平板な授業を繰り返していた我が身を反省し、生徒にとって生きた教材を探し、与えることを日本語教師としての優先課題とした。

もっとも、その課題を自分がクリアできたかと言えば心許ない。ただ、結果として生

徒たちの興味づけという意味で教材になってくれたのは、新聞の折り込みチラシだった。我が家から持参したチラシをみんなに廻すと、たちまち輪ができてにぎやかな討論が始まっていく。「高い。中国の5倍!」「これはベトナムでも高い」。そんな声がたちまち起きる。数枚のチラシを眺めながら、自国の相場と日本の相場の違いを体感している。それまで「漠然と「高い」だったものから止揚して、具体的にどれほどの価格差があるのかを購買者としての感覚でたちまち感じ取っていく。また、デパートと安売りスーパーのチラシを見比べながら、店舗、業態によつての違いを学んでいく。普段は古紙回収の袋に直行のチラシが彼女たち就労生にとっては有能なチューターとなってくれた。

また、これは他の先生の発案だったが、日本のアニメ映画を見せるという授業があった。生徒たちはトイレに立つのも惜しんで画面に見入っていた。その際に生徒に課題として与えられたのは映画の中で飛び交う日本語で意味のわからないものを片っ端からメモしていくということのみ。そして、彼女たちの書き取った?の日本語は次の授業で教材となり、一つ一つが?から!へと変わっていく。あれほど熱中して見たことはその時点で主体的な学びだ。更にそこへ自分の中で意味不明だったセリフが明確な意味を伴って、パッチワークのように映画のストーリーをつないでいってくれる。真剣にメモを取り、意味のわかった言葉を嬉々として反芻する生徒たちの姿を見て、これが「楽しみながら学ぶ(楽習)」ということなんだなとしみじみ感じた。

彼女たちと過ごした3週間余りの日々は私に日頃は考えもしなかった大切なことを学ばせてくれたひとときでもあった。例えば、昼休み。彼女たちはこの日本語授業の期間は全員寮生活である。朝、仲間と協力してその日の弁当を作り、持参してくる。その大半は母国を出る時に必要最低限のお金しか持ってきてはいない。そこに何を買っても高い日本の状況が加わるのだろう。彼女たちが開く弁当の中身はごくわずかなおかずを載せたごはんだったりした。ただ、もやしをいためただけのおかずを仲間と談笑しながらおいしそうに食べる生徒たちを見て、あらためて今の日本の飽食を思った。同時に本来持つべき日々の食事に対する感謝の念を自分自身が忘れかけていることを思い知らされた。たとえ質素な食事であっても仲間と分け合い、笑顔で楽しむことができる彼女たち。その何倍も豊かな食材を弁当箱に詰め込むことのできる日本ではここ最近「孤食」の問題がクローズアップされている。果たしてベトナム、中国と日本。どちらが幸福なのだろうか。そんなことを考えさせてくれた生徒たちの弁当だった。

日頃の彼女たちは朝から夕方まで勉強漬け。寮と学校との単純往復である。しかし、青春真っ盛りの彼女たちだ。休みの日には遊びに出かけたい。「富士山を見たいです」「ディズニーランドに行きたいんです」。上達し始めた日本語で訴えてくる彼女たちの顔を眺めながら、自分に何がしてあげられるのか真剣に考えた。そして、出た結論は「お金のかからない所で生徒が楽しめる場所」を教えることだった。たとえ3週間とはいえ、せつかく群馬に住んでいるのだから、彼女たちの思い出に残るような場所を自分なりにピックアップしていった。前橋公園、赤城山、榛名湖、桐生が岡動物園、富岡製糸場、

高崎観音、ルナパーク、群馬県庁の展望台、利根川や飛石稲荷……。彼女たちのおかげで自分の住む群馬には意外と名所が目白押しであることに気づかされる。

簡単な地図と生徒が迷った時の連絡先を書いたメモを渡し、敢えて連れていくことはせずに生徒たちが自分たちだけの力で出かけるようにした。実際に出かけた生徒は律義に報告してくれ、訪ねた場所に自分の故郷にもあった花や木を見つけたとか偶然駅で親切なお年寄りに出会い、日本語を勉強しているというとほめてくれたなどと土産話をしてくれた。生徒たちにとってみれば、本当に小さな旅に過ぎないのだろうが、彼女たちはその道中で日本の空気を吸い、群馬の自然を味わい、生きた日本語を会おう人と交わして行く。その意味でこうした旅もまた彼女たちの貴重なフィールドワークになっていることを会話をしながら心底嬉しく思った。また、彼女たちの一人は敬虔なクリスチャンで、日曜日に教会のミサに行きたいと言うので、市内の教会を紹介した。彼女はそこで思いがけず同じベトナムの人に出会い、久しぶりで母国語で楽しく語り合ったことを興奮した顔で報告してくれた。エンカウンターという言葉があるが、生徒たちがこの前橋で学ぶ中で一人でも多くの人と出会い、その中でさまざまな発見や感動を与えられることを切に祈った。

快活で一生懸命な彼女たちのおかげで私の未熟な日本語授業にも少しずつリズムが生まれ、最終週を迎える頃には授業の中でお互いに歌を歌ったり、日本語のジョークで生徒を笑わせる余裕も出てくるようになった。

そして、授業最後の日。巣立っていく生徒たちは群馬県内のみならず遠く東北地方の工場へと旅立つ子もいる。もうほとんどの生徒とは会えないのだと考えると、何とも切ない気持ちになる。振り返れば、教える側にいるはずの私が逆にベトナム、中国から来た生徒たちに教えられることの方が多い3週間だった。「どれが生徒か、先生か……」私はまさしくめだか教師だった。

毎回の授業の最初と最後には必ず大きな声を揃えて「先生、どうぞよろしくお願ひします」「先生、どうもありがとうございました」。8時間目が終わった後、疲れているだろうに自分たちの教室やトイレ、中庭などをほうきで隅々まで一生懸命に掃除してくれていた姿が心に浮かんでくる。もちろん、彼女たちを待ち受けている異国での労働は甘いものではないはずだ。しかし、彼女たちとの触れ合いの中で見た誠実さやひたむきさがあれば、きっとたくましくその試練を乗り越えてくれると信じている。

思いがけず舞い込んできた日本語教師という仕事。そのおかげで本当に得難い体験をさせてもらったと感謝している。愛すべき生徒たちには謝るのみである。彼女たちの日本語習得に自分はどれほどの貢献ができたかと思うと、すまなさがこみ上げてくる。同時に生徒には言葉では言い尽くせない感謝の心が湧いてくる。

彼女たちを送り出した今、考えることがある。「Welcome to Japan」「おもてなし」の中で日本を訪れる外国人の数は飛躍的に伸びている。そして、その中に今回出会った就労生と呼ばれる人々もいることをもっと多くの人に理解してほしいということだ。潤沢

なお金を消費できる観光客とは違い、彼女たちは懸命に異国で働くことで家族を支え、自らの可能性を広げようと奮闘する若者たちである。しかし、現実には茨の道と云ってよい。

新聞などでは時にそうした若者たちを低い賃金、劣悪な労働環境で酷使する業者や渡航、就労を巡る詐欺や犯罪が報道されている。要するに彼女たち就労生をきちんと守るセーフティネットが未だわが国では未整備になつていのである。私の体験した日本語教育一つをとっても、国や受け入れ機関が自前の教育システムや機関を持っているのではなく、現状は民間の教育機関や学校に委託という名の丸投げをしているに過ぎない。本来であれば、労働者不足が加速度的に深刻化する日本の貴重な労働力となってくれる就労生を手厚くケアし、生活環境などもきちんと整備して、余裕を持って日本語学習に専念できる受け皿づくりをすることが今後我が国では喫緊の課題になってくるだろう。

私たちの住む群馬には就労生も含め、長期、短期合わせれば多くの外国人留学生が暮らしている。群馬は昔から排他性の少ない土地柄だと言われ、概して人情に厚い所と言われる。私はそうした持ち味は外国からの人々を迎えるには本当に好適な環境だと思う。広く外国人を受け入れ、官民の別なく、どうすれば彼らが町に溶け込め、日本語も含めて現実の暮らしに適応していけるかを協力して考え、国籍の壁を越えて共生していける町にしていく。そうした方向へとこの群馬が進んでいった時に従来の地方都市から脱皮して地方でありながら、柔軟性のある国際都市へと発展を遂げることができるのではないだろうか。

今は県内外のさまざまな職場で働き始めている教え子の顔を思い出しつつ、そんなことを考えている。そして、今の私の目標は一つ。次に出会うだろう生徒たちには初めての30人の教え子にしてあげられなかったことを一つでも多くすることだ。そんなことを考えながら、再び日本語授業の教案を模索している。